



文部科学省



文字サイズ変更 大 中 小

# 文部科学省科学技術人材育成費補助事業 女性研究者研究活動支援事業シンポジウム 2013 —世界で活躍できる理系女性研究者の育成—

トップページ

プログラム

[JSTトップ](#) > 女性研究者研究活動支援事業 シンポジウム2013

## 開催概要

日 時：2013年11月11日（月） 13:00～17:40（一般公開）

場 所：TKP市ヶ谷カンファレンスセンター

主 催：文部科学省

参加費：無料

概 要：女性研究者支援について、女性研究者支援モデル育成事業とその後の女性研究者研究活動支援事業により得られた成果を検証するとともに課題解決のための今後の方策を模索するため、実施機関によるポスター発表・グループ討議及び有識者によるパネルディスカッションを行います。

また、本シンポジウムの翌日11月12日（火）には、「科学技術分野における女性研究者のリーダーシップ育成教育」というテーマで、市ヶ谷日本大学会館において、文部科学省後援（予定）の第5回日中韓女性科学技術指導者フォーラム（主催：日本大学、INWES-Japan）が開催予定ですので御案内いたします。

なお、翌々日13日（水）には、つくば市（研究交流センターと物質材料研究機構予定）に場所を移して、「東アジアの女性研究者の採用と活躍促進に関する国際調査に基づくパネルディスカッション」が開催予定ですのであわせて御案内いたします。

内容詳細につきましては、下記URLよりご確認ください。

[http://www.nihon-u.ac.jp/research/project/chairman\\_grant/news/5-jck-wlf.html](http://www.nihon-u.ac.jp/research/project/chairman_grant/news/5-jck-wlf.html)

[このページのトップへ](#)

## 交通アクセス

### 住所

〒162-0844

東京都新宿区市ヶ谷八幡町8番地 TKP市ヶ谷ビル

### アクセス

JR『市ヶ谷駅』より徒歩約3分

東京メトロ南北線・有楽町線

『市ヶ谷駅』7番出口より徒歩約1分、4番出口より徒歩約5分

女性研究者研究活動支援事業シンポジウム2013

—世界で活躍できる理系女性研究者の育成—

開催日 平成25年11月11日（月）

会場 T K P 市ヶ谷カンファレンスセンター

16：00～17：40 パネルディスカッション（パネリストによる討論60分、フロアーとの質疑応答20分、中韓研究者コメント10分×2人）

山村（略）

では、きょうは中国、韓国からの女性研究者がおいでになっておりますので、次のセッションに移らせていただきます。

山村

明日開催される第5回目中韓女性科学技術指導者フォーラムにご出席される9名の科学者を本日のゲストにお招きしております。中国から、Xuhui Wen先生、\*Lee Chang先生\*、\*Ming Hu先生\*、\*Young Lee先生\*、\*Hee Young先生\*にお来しいただいております。韓国からは、Heisook Lee先生、\*Hyunmin Kim先生\*、\*Jion Alee先生\*、\*Unkyon Lee先生\*にお来しいただいております。Xuhui Wen先生と Heisook Lee先生には、本日ご講演いただけるということで、非常に光栄に思っております。まずは Wen先生の講演です。Wen先生は China Academy of Chinese Medical Sciences の Experimental Research Center にて教授兼副所長を務めておられます。それでは Wen先生お願ひいたします。

ヤン・レイ 皆様、きょうはこのような機会を与えていただきて、ありがとうございます。ご紹介いただきましたヤン・レイでございます。中国医学科学院の臨床医学研究所から参りました。

女性リサーチャーでございますけれども、中国におきましてはだんだん役割もふえ、分野もふえました。科学系、テクノロジー、エンジニアリングといった工学系でもどんどんふえてきているのが昨今でございます。4,000万人ほどおりますので、大体13%ぐらいの科学系、理科系の研究者がいると言われています。基本的には男女平等の数ということになります。

ただし、まだ課題とか問題点もございますので、その幾つかをこれからお話しさせてい

---

ただきたいと思います。

まず、第一に非常に高いレベルのリサーチというのが、女性研究者の間ではあまり行わ  
れていません。中国全体の 6 % にすぎないと言われています。

男性に比べまして女性研究者の登用率は非常に低く、職場の中でも低いポジションにあ  
ると言われています。そして、研究分野での女性の分布も非常に均衡が悪く、特に基礎研  
究の分野では女性の比率が低くなっています。

3 つ目としましては、女性研究者の家庭と職場でのバランスのとり方も課題です。

また、現在、この世の中はどんどんと国際化しています。つまり、国際的な科学技術の  
分野において女性が平等に参加する権利を、そういった国際化の中でいかに得ていくのか  
が課題です。

本日の午後ご紹介いただきましたプレゼンテーションや皆様のご経験に基づく情報とい  
うのは、私どもにとっても非常に有益なものでございます。中国の政府や大学、研究機関  
は、ともに女性の学生、研究者の増加ということについて非常に注目しております。

例えば、女性限定の役職をつくったり、女性向けのポジションをつくったり、さらには  
子供を産んだ後に 4 年間の休みがとれるといったような仕組みもございます。また、中国  
の若い女性研究者向けに、中国の科学技術協会なども特別な賞を設けています。

このようなポジティブなさまざまな策により、若い女性研究者もキャリアをどんどんと  
伸ばしていくける可能性がございます。

どうもありがとうございます。

③

山村 Wen先生ありがとうございました。とても有益なプレゼンでした。簡潔なご質問  
でしたら、お受けする時間がございます。中国の女性研究者の置かれている事情は日本と  
類似していますので、本日のディスカッションは皆さんにとって有益なものだったと思  
います。何かご質問のある方はいませんか。

それでは、次は Heisook Lee 先生の講演になります。Lee 先生は梨花女子大学校で数学科  
の教授、また Korea Advanced Institute for Supporting Women in Science, Engineering and  
Technology (韓国女性科学技術高等研究所) でも所長を務めておられます。Lee 先生お願  
いいたします。

ヒソク・リー ご紹介どうもありがとうございます。古くからの友人にも何人かに会えて、非常にうれしく思っています。私は東京に来るのは何回目で、お茶の水女子大学とも非常に深い友好関係を持たせていただいております。

きょうの午後のお話は、非常に興味深く拝聴いたしました。韓国と日本では、女性研究者、特に理系の研究者が直面している課題やいろんな困難な状況に似ている部分があり、また同じものもあると感じております。

ジェンダーという問題を考えますと、もちろん数字も大事だと思いますけれども、ダイバーシティも重要だと思っています。では、数字的なところで日本と韓国の状況を幾つかご紹介したいと思います。

O E C D諸国の中における女性の参加率というのは、実は日本が最下位です。韓国がその上をいっているということで、私自身はそれを非常にうれしく思っています。冗談ですけど（笑）。

そして、最近の報告ですと、ジェンダーの平等というところのインデックスを見ますと、韓国は111位で、日本は100位よりも少し落ちたところで、そちらは日本のほうが上回っています。

しかし、両国の問題としてなかなか理解しがたところは、女性が非常に高い教育を受けているにもかかわらず、それを十分に生かしきれていないというところです。パネリストや今回の講義などを通じましても、韓国、日本両国ともに一生懸命努力をしてジェンダーのギャップを埋めようとしています。そして、韓国、日本ともに、生涯にわたるような女性研究者向けのサポートがあり、優秀な女性研究者に対して長期的な職の確保といったサポートもあります。

きょうの講義を通して日本から出てきた言葉というのは、韓国でも常に耳にしているキーワードがたくさんありました。なのに、なぜ私どもはその点について改善ができるいないのでしょうか。類似点もありますけれども、両国において違いもあります。例えば日本ですと、大学の助成の仕方も少し違っていると思います。研究を通して大学に資金を提供するというのは、非常にすばらしいことだと思います。

韓国では、2002年にそういった研究分野での女性を支援するということで法制化を行いました。この法律のもとに、科学技術分野の女性研究者を支援するセンターも開設されました。より制度的な形でこの分野で活躍する女性を支援する取り組みです。この法律をもとに、4年、5年ごとに基本計画を政府が制定して、さまざまな分野での支援を行ってい

---

ます。私の見解は間違っているかもしれませんけれども、科学技術分野の女性の会議というものもありまして、そこがジェンダーの役割において非常に重要な活動を行っております。

私たちのベストプラクティスなどを幾つかご紹介できればと思っていたんですが、ちょっと時間の関係もありますので、そのかわりに皆様に幾つかの疑問を提示するという形にさせていただければと思います。

皆さんのが受けている助成というのは、年間で十分な額でしょうか。

または、大学の文化を変えるとか、大学の意識変革というお話がたくさんありましたが、それはどれぐらいの時間かけてやっていくおつもりなんでしょうか。

皆様のこういった事業の成果については、どのように測定されているのでしょうか。

また、政府からの助成を受けて何らかの事業を行った後、それがどのように進捗しているかということをいかにモニタリングしているのか。そういう問題もあると思います。

日本にはかなりの数の大学があります。80大学ほどを支援していくというのはかなり大きな取り組みだと思いますが、一定期間だけ80の大学を支援することによって本当に日本全体の文化が変わるものなのでしょうか。

皆様に対して疑問を投げかけているというよりも、私も政府から助成を受けて何かを行うという立場において、常に自分自身にも同じ疑問を投げかけています。

また、こちらには男性もいらっしゃっているようですけれども、日本と韓国との間で同じような会議を開けたらどうかということを私からご提案できればと思います。2国間のこういった男女差別の違いというギャップを埋めるためにどのように投資をし、いい結果をもたらすことができるかということ、効率よくどうやればいいかということをぜひ考えていただきたいと思います。

以上でございます。

④

山村 Heisook Lee先生ありがとうございました。たくさんのご質問をいただいきましたが、私ではすべてお答えできそうにありません。どなたかLee先生からのすべてのご質問にお答えできる方はいらっしゃいますか。

大坪先生、どうぞ。

大坪 日本語でもいいですね。通訳してください。

アメリカのN S Fから出ている情報があります。日本で言えばJ S Tに相当するところだと思いますが、そこで年表をつくっています。N S Fが女性研究者支援を始めたのが1980年です。それから今まで40年たって、指摘されている問題はアメリカだからすごく進んでいるということは決してなく、やはり問題がたくさんあるということです。

例えば、大学の中では相変わらずひずみがあるし、家庭とのワーク・ライフ・バランスの問題もある。それから、何かに手を挙げようと思っても、女性研究者自身の中に自信が持てない、自分が手を挙げることに確固たる信念が持てない。そういう現実があるということがちゃんと1ページ目に書いてあります。それはアドバンスというプログラムです。

ということは、優に40年はかかるというぐらいの覚悟が要るのではないかと思います。世代がかわってから変わるということもあると思います。

ですから、お金の切れ目が縁の切れ目になっては絶対にいけません。お金が切れても続くような……お金は続くべきだと思うので、続けていただきたいと思います。N S Fは、今に至るまで40年間、手を変え品を変えお金を出し続けてきているんです。私はそこを訴えたいと思うんです。トップダウンの仕事で国に手を引かれたら、きれいさっぱり、10年やろうが、20年やろうが、あっという間にもとに戻ります。それは確信しています。なので、絶対に火を消さないでほしいということをお願いいたします。

山村 では、そろそろ時間がまいりました。

⑤あらためて感謝申し上げます。Wen先生、Lee先生、素晴らしいご講演ありがとうございました。以上をもちましてこのセッションを終了させていただきます。

では、田中調査役にマイクをお渡しいたします。

司会 それでは、ただいまスピーチされました中国、韓国の研究者の皆様はこれでご退席となります。もう一度盛大な拍手でお送りしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上で、本日のプログラムは全て終了いたしました。パネリストの皆様もありがとうございました。

それでは、本日のシンポジウムをこれにて閉会いたします。最後までご清聴いただき、ありがとうございました。

(了)